

海外ボランティア体験記

エルサルバドル NGO(JICA)

農学部生物環境工学科3年 吉川 祐作

滞在先 エルサルバドル共和国
IPES (JICA)

期間 2014年3月中旬～
2014年8月末(5ヶ月)

動機 途上国の農業の現場を見てみたかったから。



お金

・費用≫ 航空券：27万円、生活費：6万円/月、旅行費：4万円

≪一週間のスケジュール≫

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土・日 |
|----|-----|------------------|-----|-----|------|---------------|
| AM | 農作業 | 語学学校 | 農作業 | 農作業 | 農民会議 | 首都に出て喫茶店に行ったり |
| PM | 農作業 | ボランティアとランチ、Wi-fi | 農作業 | 農作業 | 農民会議 | |

農作業は時期によってばらつきが大きいです。草刈りや肥料運びが多かったです。向こうでは、大企業に依存する農業からの脱却を目指した、農民たちの作物に対する主権を取り戻そうとする動きも活発で、よく会議が開かれていました。

《参加前後のスケジュール》

| | 留学前 | 滞 在 中 | 留学後 |
|--------|--|-------------|-----|
| スケジュール | 2013年9月 スペイン語開始 11月 航空券予約 12月 Skype 面接 2013年3月 出発 | | |

○ 前置き「ルワンダとエルサルバドル」

1994年、中央アフリカのルワンダという国で虐殺が起き、100日の間に80万人が殺されました。多数派のフツ族が少数派のツチ族の抹殺を図ったのです。いわゆる「民族浄化」——国連も初めて「ジェノサイド」という表現を用いざるをえなくなった事態でした。

ぼくが途上国に興味を持ったきっかけが、この事件を知ったことです。詳細は最後に回すとして、以後ぼくは自分なりに途上国の人々の生活に寄与できればと考えるようになりました。ただ、学部で学べる知識と現実との間には越えがたい溝があります。その溝を少しでも埋めたかった、それが学部三年前期を休学してエルサルバドルに行った理由です。

○ 現地での生活について

順番が前後しますが、まず現地で何をしていたのかを話します。そもそもぼくがエルサルバドルという国に行くことになったのは、JICA職員の方に紹介されたからでした。その方がエルサルバドルの青年海外協力隊OGだったために、行くことになっただけで、初めから中米に強い思い入れがあったわけではありません。



ぼくが滞在していたのは、パーマカルチャーの啓蒙を目的としているIPESというNGOの土地でした。NGOというと格好いいですが、実際は農民さんの集まりです。半年間、ぼくは畑の隣にある小屋で、六時に起きて四時まで農作業をし、九時に就寝するという生活を送っていました。

パーマカルチャーというのは、作物の多様性を大事にし、自給自足を目標とする持続的な農業スタイルです。主食であるトウモロコシやフリホレス（豆）、トマトにナスにプランテン（食用バナナ）。雨期（5月から10月）と乾期をまたいだぼくは、播種から収穫までを一通り体験することができました。日々は主に農作業で過ぎて行きましたが、現地の農民たちを対象とした農業教室や、農地の視察にも参加することができました。

ただらと書き連ねるよりも、印象的だった体験をいくつか。現地では、作物や雑草の生命力に何度も励まされました。太陽の光を受け、日ごとに成長する植物の逞しさには目を見張るものがあります。また、緑の葉を茂らせた六月のトウモロコシ畑が、まるで海のような美しさを湛えていたことが、今でも忘れられません。



もう一つ特筆すべきは、現地の農民たちの優しさです。ぼくの未熟なスペイン語を、彼らはよく理解しようとしてくれました。やさしい単語で作物の説明をしてくれたり、作業の仕方を教えてくれたり、家に招いてくれたりと、数え切れないほどお世話になりました。部屋には無数の蚊、シャワーには鼠の死骸、日本人は街に出ても一人もいないという状況で、ぶじに滞在を満了することができたのは間違いなく彼らのおかげです。

○ 準備について

出発前の準備について少し話します。ぼくが初めに立てたのが「途上国の農民の生活を、できるだけ農民の目線で見ると」という目標でした。こうして半年を終え、後悔する点も多々ありますが、今でもこの目標だけは達したと自負しています。

また、行く前に必死になったのが語学です。スペイン語圏のエルサルバドルでは、英語教育が浸透していません。まして貧困層である農民たちなら尚のこと。出発するまでに、どうしてもある程度の語学力を身につけておく必要がありました。友人にスペイン語の話せる方を紹介してもらい、週に二日は会話に励みました。

もう一つ、留学を考えている方に勧めたいことがあります。それは日本の抱える政治的問題を、その国の言葉で説明できるようにしておくことです。世界の中での日本の相対的な立ち位置を、海外に行く前に確認しておくことは必ずや益になると思います。

○ これからのこと

さて、帰国して三ヶ月が過ぎようとしています。ぼくはすっかり日本の暮らしの鋳型に収まり直しました。エルサルバドルでの日々も、夜を数えるにつれ遠くなって行きます。それは仕方がないことで、でもやはりさびしいことで、ぼくはそれも踏まえた上で「これから」を考えていかななくてはなりません。

おそらく、この二律背反は誰もが経験するところでしょう。新しい視野が増えるのは素敵な経験ですが、それと引き換えに失うものがあります。前にどんどん歩くのもいいけれど、時どきは振り返って、あのころの自分どうだったのかなと、思い出してあげることが

大切なのだと今は思います。

長くなりましたが、最後に冒頭のルワンダ虐殺について。これをアフリカだから起きたことだよ、と片付けるのは簡単だし、実際にそう発言した政治家もいます。しかし、この二つの「民族」を作ったのは旧宗主国であるベルギーです。もともと混血の進んでいた二つの民族を、彼らが二分し、一方を優遇したために民族間の軋轢が生まれました。

同じようなことは世界中で起こっています。日本人が日々口にしている食事も、大半は別の国の誰かが汗水流して栽培したものです。そういった意味で、ぼくたちは日本にいてもいつだって世界とつながっているのでしょう。世界は広いなあって、しみじみします。

では、この拙い文章が少しでも留学をめざす方の助けになることを祈って。

《留学アンケート》

①おすすめ（ガイドブックにないスポット、観光地、店、お気に入りの場所、食事 etc）

エルサルバドルに来てみたいという奇特な方には笑、首都の美術館をお勧めします。あとはソウルフードの **pupusa**（トルティーヤに豆とチーズを挟んで焼いたもの）を食べることかな。観光資源に関しては、同じ中米でもグアテマラやコスタリカの方がずっと豊富です。

②マナーやタブー

特になかったです。エルサルバドルの人たちは概して親切でした。ただ、首都の治安はひどく悪いので、金目のものはできるだけ持ち歩かないようにしたほうがいいです。

③持って行って良かったもの（重宝したもの、喜ばれた日本のもの、ウケた特技）

ビスコなど日本のお菓子。ちょっとした折に配るとポイントが上がる。

④留学前の必見本 or web サイト

出発前も滞在中も、本に支えられました。留学と直接は関係ありませんが、ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』、小川洋子『博士の愛した数式』、夏目漱石『こころ』など……物語には現在を意味付ける力があると思います。